

誘 拐

1) 雪の中の発見

夕暮れの帷が降りた冬の大都会は、静かに息づいていた。

見栄えのしない古い教会の鐘塔から、8時を告げる鐘の音が響きわたった。それから間もなく、ある工場の横門が開き、一人の男が道へ歩み出てきた。

男はルートヴィヒ・アムスターだった。大きな工場の労働者で、これから家路を辿るのである。だが家路は快適とは言いかねた---街のはずれ、しかも、市内でもいちばん汚らしい場所を歩いて行かねばならない。貧民街や悪臭ただよう工場地帯、荒れ果てたあちこちの広場、反吐の出そうなごみ捨て場などを。

昼間でさえ、人影が見えない程だった。アムスターが歩いていく帰路は、今ひっそりと静まり返っていた。一方アムスターの胸の内は、怒りで煮えくり返っていた。

何も不思議じゃない----1時間前、首切りを申し渡されたのだ。上役の不当な言動に、どうしても服従出来なかったからだ。

ルートヴィヒ・アムスターはこの道を熟知していた。もう何年も前から、毎日のように歩く道だったから。目を閉じて、ちゃんと見分けがつく位だった。

だから、闇夜とも言える暗さに気が滅入ることはなかった。街灯の明かりや雪の光にもかかわらず、道はずいぶん暗かったけれども。ただいつもより、幾分そろそろと歩いていった。それというのも、数時間前に降り積んだ薄い雪の下には、滑りやすい氷が張っていた。昨晚できた氷なのだ。

だからアムスターはいつもよりゆっくり歩いた。滑りやすい個所に注意しながら。

30分ほど歩くと十字路に差ししかかった。そこで馬車の轍が目にと止まった。まだ出来たばかりの車輪の跡だった。普段であれば、ちょっと前からまたゆっくり降り始めた雪でかき消されていたはずなのに。

轍は北に向かっていた。小高い丘に接する、向こうの町の草原地帯へ。アムスターには少々訝しく思えた。この辺りを馬車が通ることは滅多にない。そしてそんな馬車によってしか、こんな狭い車輪の轍は出来ない。時々この場所を通過することもある荷馬車には、もっとがっしりした車輪がついている。

アムスターの不審の念を、一層強めるものが見つかった。

十字路の近くの片隅に、街灯が立っていた。その明かりが、雪の上に鋭い光を投げかけていた。馬車の轍にも---そしてさらに何か他の物にも。

アムスターは立ち止まった。

身を屈めながら、もっとよく見ようとした。

彼は頭を横に振った。

大量のガラスの破片が、キラキラときらめきながら目に飛び込んできた。まるで薔薇の花であるかのように、そこいらの白い地面に血痕が点々としていた。

これらはすべて轍の脇に見つかった。

『ここで何が起きたのだろう？ここで----こんな気味の悪い場所、救いを求めて叫び声をあげても何の役にも立たず、たちまちかき消されてしまうような所----誰一人助ける者のいない所で？』

アムスターはこう自問自答せざるをえなかった。しかし答は見つからなかった。少なくともすぐに見つけることは出来なかった。

しかし好奇心をそそられて、もっと詳しく知りたいと思った。

果たして実際、血痕は広範囲に及ぶことがわかった。ガラスの破片が散らばっている所より、ずっと遠くまで広がっていた。

約1メートルほど離れた道路の縁に、板塀があつたが、血のしずくはその辺りまで見られた。

板塀の割れ目から、灌木みずきの錆色をした枝が顔を出していた。葉の表面は雪で覆われていたし----血痕も付着していた。

ルートヴィヒ・アムスターの目付きは一層真剣になり、さらに別の物を見つけた。

灌木みずきのすぐ横に、小さな包みが落ちていた。彼はそれを拾い上げた。平べったい、小さくて軽い長方形をしたもので、ありふれた包装紙で包まれていた。

包装紙の包み口は開いていたが、そこは、もともと糊がわりに、黒パンで2カ所封をされていたし、今でもまだねばついていた。アムスターは小さな包みを裏返してみた。そして又しても、首を横に振った。

『近くの警察署へ！』と、そこには鉛筆で書かれていた。不揃いな文字、明らかに大急ぎで書き流された細くて長く延びた文字だった。

薄汚い紙の上に、しっかりと呪縛された救いを求める叫びのようだった。

アムスターの印象では、これは生死に関わる重大問題のごとく思えた。

今ではもう思い悩んだり、思い煩うことはなかった。

寂しい路上に残された馬車の轍、ガラスの欠片と血痕、これらは次のようなことを示していた。馬車に乗っていた客が、無理やり窓ガラスを打ち砕き、小さな包みを、ひょっとすると自分の助けになるかもしれぬと願いながら、窓の外に放り投げたのだ----労働者であるものの、賢明なアムスターの脳髓の中では、こんな風に一連の事実を組み合わせ、身の毛もよだつ恐ろしい物語がたちまち出来あがった。そして可能な解決をはかるべく、自分のなすべきことをしようと考えた。

そのうえ、アムスターは温かい心の持ち主だった。だからこそ、この場所で馬車の中から声にもならぬ絶望の叫びをあげた、身も知らぬ不幸な人間を救う気持ちに駆られたのだ。

急ぎ足で歩きながら、彼はますます歩を早めた。そして終に駆け足になって近くの----とはいえ苛立つ気持ちにとっては、実際遠すぎる警察署へ----辿り着いた。

息せき切って、アムスターは警察詰め所に駆け込んだ。そして手短かに、発見物について報告した。

彼は、隣の小部屋に行くように言われた。

そこは、ときどき仕事をしている警部の事務室だった。

『何があったんですか？』

こう言いながら、お役人の若い男は会話を中断した----年輩の、萎びた風采の小男と話していたのだ----そしてアムスターの方を向いた。

『この小さな包みを、庭園通りで見つけたんです。』

『見せて貰いましょう。』

アムスターは包みをテーブルの上に置いた。

萎びた風采の小男は、そちらにちらっと視線をやったが、お役人が小さな包みを引き破ろうとすると、あわててペンナイフを開いて手渡ししながら、こう言った。『こいつで切って開けて下さい、警部殿。』

『どうしてです？』

『そこに残された封印を傷つけないでないと、時には、役立ちます。』

『私としたことが、じゃあそうしましょう、ミュラーさん』と、若くて上品そうな紳士は、笑いながら答えた。警察の仕事についてから、まだそれほど日が経っていなかったのだ。

紳士はクルト・フォン・マイリングゲンという名前で、国のお偉いお役人の息子だ

った----その上たいそう愛すべき人物なのは間違いなかった。というのも普通であれば、ミュラー氏の非難がましい言葉、もちろん的を射たものであったが、そういう言葉が、受け入れられたりはしなかっただろうから。

フォン・マイリングゲン氏は愛すべき人物であるばかりでなく、正義漢あふれる、賢明な人物だった。だからこそ、秘密警察官ミュラーの取扱いでは、若くて上品だが、仕事の点ではまだ経験の浅い自分が、いろんなことを勉強できる人間として接したのである。だから警部は包みを用意深くナイフで切り開き、その奇妙な宛先を大声で読み上げた。そして包みから一冊の品のいいメモ帳を取り出したが、外表紙には、金色の頭文字がきらきらと輝いていた。

『それは女性のもですね』と、その間、包み紙を詳細に見入っていたミュラーは口をはさんだ。『それに女性は金髪です。』

2人は不審そうにミュラーを見つめた。ミュラーは、包みの封印の一つにこびり付いている、細い金髪の髪の毛を指し示した。

『どんな風に私は殺害されたか』と、フォン・マイリングゲン氏はその後、大声で読み上げた。メモ帳の最初の数ページを、大慌てでパラパラとめくっている内に、肉太のアンダーラインが引かれた箇所に行き当たったのだ。

マイリングゲンはひどく驚いたが、アムスターもそうだった。探偵のミュラーは包みの封印に静かに見入っていた。

『この表題は間違いじみています』と、警部は言った。ミュラーは肩をすくめると、アムスターに尋ねた。

『じゃあ、あんたはこの小さな包みをどこで発見したんですか？』

『庭園通りです。』

『いつのことです？』

『およそ20分前です。』

『もっと詳しく話して下さい。』

アムスターは自分の目でみたことを、簡潔に明確に報告した。賢そうな顔付きから、言葉数こそ少ないものの、アムスターの見たものに信頼を寄せることが出来た。また善良で誠実そうな目付きは、無条件で彼の言葉を信じてよかった。

『どこへ女性は連れ去られたのでしょうか？』と、探偵のミュラーは、他人にというよりは、自分自身に聞くように尋ねた。

警部は大急ぎで、メモ帳のアンダーラインが引かれたところは、他にないかと調

べた----だが見つからなかった。

『どうしてこれが女性だと思うんですか？この書体は、男性のもののように見えますが。こんなに固く、こんなに無骨で----』

『ペンがひどいものだったから、文字もそうなただけでしょう』と、ミュラーは警部の言葉を遮りながら、包みを指し示した。『ここにも同じ文字が書かれています。しかしこの同じ人の手になる鉛筆は、先が細く尖り固いものです。だからここには、文字の女性らしい特徴がずっとはっきりと現れています。ところで、男性の手の親指の皮膚は、こんな繊細な形はしていません。この紙にパンで封印をしたとき、目立つ位、はっきり指紋として残されている、この華奢な親指のようには。』

警部は立ち上がっていた。

『あなたが正しいようですね、ミュラーさん。それじゃあ、当面、女性の救出が問題だと仮定しましょう。この女性が気違いかどうか----これは、明かになることでしょね。』

『ええ----そのうち明らかになるでしょう』と、素っ気なくミュラーは答えて、自分の上着を掴んだ。

『小さなメモ帳の中味も知らずに、もう出かけるんですか？』と、フォン・マイリンゲン氏は尋ねた。

ミュラーは頷いた。

『車輪の跡を調べれば、ひょっとして何かもっと詳しいことがわかるかもしれません。あなたはこのメモ帳を読んで下さい、あるいは適切な処置が見つかるかもしれません。』

ミュラーはすでに冬用の上着を着込んでいた。

『雪は降っていないでしょうな？』と、ミュラーはアムスターの方を向いた。

『私がこちらへ急ぎ足でやって来た時には、ほんの少し粉雪が舞っていました。』

『ほうそうですか、結構です。来て下さい。』

この興味深い事件に、すっかり心を奪われていたミュラーは、上司に軽く会釈をすると、大急ぎで部屋を出ていった。

アムスターも後に続いた。

警部は満足な表情を見せていた。この事件が、一番の適任者の手に任されたことがわかっていたからだ。

再び書き物机に腰をおろすと、警部は、奇妙な経緯から自分の手にはいったメモ帳を読み始めた。びっしり書き込まれたページを、警部の目は飛ぶように読み進んでいたが、そのスピードはますます速まり、中味に対する関心も一層強まった。

そしておよそ半時間後には、まるで熱に浮かれたようになって、ざっと目を通し終えたが、休憩も取らず、部屋の中をあちらへいたりこちらへ動いたりしながら、謎に満ちたこれらの文章から呼び覚まされた様々の考えに、結論を出すことは出来なかった。

若いお役人が、こんな風に考えあぐねていたとき、ミュラーがいつものように、静かに部屋へ入ってきた。そして愛想よく挨拶を述べ、ステッキを部屋の隅に置くと、見た目にも明かな満足した表情で、雪のせいで湿っぽくなっていた帽子を脱いだ。フォン・マイリングゲン氏は、ミュラーが入ってくるのに気付かなかった----今は深い前屈みの姿勢で机につき、メモ帳の表題をじっと見つめていた----謎めいた言葉、『どんな風に私は殺害されたか』という言葉。

『これは一人の女性です。上品なご婦人です。そしてもし彼女が気が狂っているとしても----その狂気は、筋のとおった狂気です。』

こう、ミュラーは冷静な調子で話し始めた。すると若い警部は急に立ち上がった----そしてまるで夢を見ているかのように、探偵のミュラーが手渡した、立派な白いハンカチを受け取ったが、このハンカチからは、えもいえぬ甘酸っぱい香りが漂ってきた。

『彼女のものでしょうか？』と、警部は呟くように言った。

『彼女のものです』と、ミュラーは繰り返した。『そうだと考えていいでしょう。このハンカチにも、頭文字 A. L.があります。メモ帳に見つかったのと同じ頭文字ですから。』

フォン・マイリングゲン氏は席から立ち上がっていた。

興奮しているのが、はっきり見て取れた。

『それで？』と、フォン・マイリングゲンは尋ねた。

そこで、ミュラーは新たに発見した事実を報告した。

必ずしも十分じゃない----とそんな風に、フォン・マイリングゲン氏は考えた。探偵のミュラーが報告を終えたとき、苛つきながら肩をすくめたのだ。

ミュラーには、若い紳士がもっと多くのことを期待しているのがわかっていたので、おかしくなって微笑んだ----出かけていって、知りえた結果に十分ミュラーは満足していた。

『それですべてですか？』と、フォン・マイリングゲン氏はがっかりして、ぶつぶつ呟いた。

『これですべてです』と、探偵のミュラーは平然と同じ言葉を繰り返し、こう付け加えた。『これでも多すぎるくらいです。中味の一杯詰まったメモ帳、その内容についてですが----あなたの興奮の度合いから推測できますよ、警部殿----重要ならざるものはありませんし、ハンカチや奇妙な香水----繰り返しになりますが、多すぎるくらいです。それに加えて封印のこともありますし、さらにいろんなことがわかっています。このご婦人を救出できるでしょう。あるいは最悪でも、少なくとも仇は打てるでしょう。』

『そうですか、じゃあ、あなたの出来ることをやって下さい』と、フォン・マイリングゲン氏は親しそうな微笑みを浮かべながら答えた。

老ミュラーはうなずき、『よろしいですね？』と言いながら、メモ帳とその包み紙を、警部のテーブルから取り上げると、その二つを手にしたまま、隣の小さな部屋へ引き下がった。探偵ミュラーはメモ帳を読みだした。彼がメモ帳の内容を調べている内に、われわれは、ミュラーが出かけていった夜の路上で、何を発見したのか見てみることにしよう----

黙したまま、ミュラーとアムスターは急ぎ足で出かけていったが、夜の闇はいやなものだった。急いだので、15分後には問題の場所へ着いた。

そもそもミュラーにとっては、ここでの新しい発見は何もなかった----しかし、荷馬車が進んでいった方向は確認できた。馬車を引いていた一頭の馬の蹄の跡が、雪の中に残されていたが、それを手がかりにして方向がわかった。

『車輪の跡を、進んできた方向に辿っていつてもらえますか？』と、ミュラーはアムスターに尋ねた。アムスターはそれを承知した。

『しかし、出来るだけすぐに、報告して貰わねばならないんですが！』

『そうしましょう』と、労働者の方は答えた。それから二人は握手して、お互い別れた。

ミュラーは別の方向の調査に取りかかろうとしたが、その前に、ガラスの破片のひとつに手を延ばした。

『こいつは普通のガラスだ』と、破片を見つめながらミュラーは言った。『だとすると、貸し馬車にすぎなかったんだ。しかもひずめの跡からわかるように、一頭立ての辻馬車だったんだ。』

さて、ミュラーは車輪の跡を辿っていった。

今まではほんの少ししか降っていなかった雪が、今や激しく落ち始めた。そこで

ミュラーの足は早まった。

まもなく、轍は雪に覆われてしまいうに違いなかった。今の内なら、轍はまだかなりはっきりと目に見えた。

ミュラーは今、道が二つに分かれている場所に立っていた。

ミュラーはひとつの道、そしてまた別の道と長い距離を辿ってみたが、無駄足だった---風は、この辺りの高台ではひどい荒れ模様で、その上、雪も今や激しく降り落ちていた。だから更にいろんな調査を試みても、この雪のせいで、無駄に終わるだろうということが十分考えられた。

そんなわけで、ミュラーは苛立たしくチョツと言いながら、調査を中止すると道を引き返し始めた。

ミュラーは町へ向かって引き返していたが、今や足がいつそう早まっていた。それにもかかわらず、目は注意深く周囲のすべてに注がれていた。そしてその結果は、吉と出た。目にとまる何かがあったのだ。

道がふた手に分かれている場所から、遠からぬところで、一本のりんぼくが風にゆらゆらと揺れていた。

重い雪は、りんぼくからほとんどすべて払い落とされていた。まるで、新たに降り落ちてくる粉雪から身を守っているように見えた。にもかかわらず、その灌木には、刺や半ば萎れた葉っぱや青い実のほかに、更に何かがついていた。小さな鳥の巣と、ひらひらしている一枚の布ぎれだった。ミュラーが灌木の近くへやってきた時、布ぎれはちょうど、風でひときわ高く膨れ上がったのだ。

急いで、探偵のミュラーはその木のそばへ歩み寄り、刺についている柔らかな織物をはがし取った。

上品な、まったく独特の香りが、ミュラーの方へ漂ってきた。ハンカチの香水の香りは、趣味の好きな人が普段好んでいる香りより、ずっと強いものだった。

これは、謎に包まれた乗合馬車のコースと関係あるに違いなかった。

そんなハンカチを持った人たちが、ここへやって来るのは、ほんの稀なことにすぎなかった。

だとすれば、品のいいメモ帳を、馬車から外へ放り投げた同じ人物が、まだちょっと前まではこのハンカチを所有していたのだ！

近くの街灯の明かりで、ハンカチとメモ帳が同一人物のものと、ミュラーには間違えようもなくはっきりとわかった。ハンカチにもメモ帳にも、エレガントに仕上げられた頭文字 A. L. が見つかったのだから。

これらが、今回ミュラーが夜の内に外かけて行って、わかったことや発見したりしたことだった。

2) メモ帳の語ること

ミュラーが入り込んだ小部屋は、本当に気持ちのいい暖かさだった。ミュラーはメモ帳と包み紙を隅っこにあるテーブルの上に置き、暖房ガスの栓を開け、窓のシャッターを下ろした。こんな風に部屋を居心地よくすると、冬用の上着を脱ぎ、少し馬鹿丁寧に思えたが----ミュラーは大変几帳面な男だった----洋服掛けにかけて、風に乱れた髪を撫でつけると、ようやくテーブルについた。

それからまだ時間をかけて、一本の葉巻に火をつけると、初めてメモ帳を手にとった。

有名な探偵ヨゼフ・ミュラーは、落ち着き払って仕事にとりかかるのである。長いこと、たいそう長い時間、ミュラーは上品なメモ帳の外表紙に見入っていた。

それは、およそ 10 センチ程の大きさで、普通のサイズだった。そして茶色の皮で装丁されていた。上部の左かどに A. L. の文字があった。それは優雅にも金で仕上げられていた。

それぞれのページは上質の光沢紙で出来ていた。ページ数はほぼ 50 ページ位で、どのページにも何か書かれていた。文字は最初のうちは、きれいな細い文字で、あの奇妙な表題とは甚だしい違いがあった。まず最初は自由で大胆な文字だったが、先になるに従って、不安げな歪んだ文字になった。いや、震えるような、まるで自分自身の中へ身を屈めているような文字だった。

ミュラーは読み始める前にメモ帳に触ってみたが、それにはちょっとした膨らみがあった。小さなポケットが付いていた----ポケットの中味のせいで、膨らんでいたのだ。ミュラーは折り畳まれた壁紙、人目を引くが同時に薄汚れた、一枚の壁紙を引っ張り出した。暗青色の壁紙だった。そこには、不格好なジグザグの線が金色に印刷されていた。

ポケットには更に何かが入っていた。丸められ、また皺をのばした路面電車の切符だった。

ざっと見た後で、ミュラーは二つのものを又ポケットにしまったが、このポケットの皮からは、A, L.のイニシャルのついたハンカチと同じ素的な香りが漂ってきた。ただし、ハンカチの時より香りはずっと強烈だった。

探偵のミュラーは、フォン・マイリングゲン氏がそうしたように、メモ帳の一番重要な箇所から読み始めたりはしなかった。最初のページから読み始めたのである。

『ほほう----この女性はまだ若いんだ』と、最初の数行を読んだ後でミュラーは

呟いた。『変わることなき友情を、まだ信じている。』その数行には、こう書かれていた。『今日7月28日、ヘートヴィヒが旅立った。私はとても悲しい。ひょっとしたら、二度とあなたに会えないかもしれない。あなた、たった一人の、可愛らしい、確固として変わることのない恋人たるあなた。』

『当時は、まだとても無邪気で幸せだったんだ』と、次の覚え書きを読んだ後、ミュラーは付け加えて言った。

その文章は、ちょっとしたハイキングや、ボーイフレンドを訪ねたこと、また家の中の細々した出来事に関係するものだった。

ミュラーは、ゆっくりと先をめぐり続けた。

1 ページ 1 ページとミュラーはめくっていたが、その手の下で、紙がパリパリと音をたてた。そしてついにあのページ、力強い、意図的に無骨な文字で書かれた奇妙な表題のページへとどり着いた。『どんな風に私は殺害されたか。』

ミュラーの頭は、理解し難いその言葉と後に続く文章に、深く覆いかぶさり、目は文章を飛ぶように追っていた。

何と、すっかり文字が変わってしまったことだろう！いかなる興奮のせいで、こんなにも文字が変化するものだろうか？---精神的な障害自体につきものの、興奮だろうか？あるいは近づく死に対する恐怖、近づいてくる避けようもない犯罪に対する恐怖の念が、迫害される者の心に引き起こす興奮だろうか？

あの無邪気な覚え書きと、この身の毛のよだつ筆跡を生み出したのは、疑いもなく同一人物だった。そのことは、二つの文字のそれぞれから窺われる、並外れた性格的特徴によって証明できることだった。

ハンカチにもメモ帳にも、インクで A. L. という頭文字が書かれていたが、その二つのインクもお互い完全に違っていた。最初の数ページには、金色に輝くばかりのインクが認められたが、後の方は、不揃いな半ば化学分解したような黒インクで書かれていた。滅多に、文章を書かない人たちが使うような種類のインクだった。

文字も今では、ここかしこで消えかかっていた。特に最後の数行は、この文章を書いた不幸な女性が、苦しみに打ちひしがれ、大慌てで書き、乾くのも待ちきれなかったせいか、ほとんど判読できない位だった。

さて、そうして例の表題だ！

狂気のせいで、こういう表題を無造作に書いたのか？あるいは A. L. はこれを書きながら、いかなる救いの手ももはや手遅れに違いないと考えたのか？自分のもて犯されようとしている犯罪を、もはや何であれ、あるいは誰であれ、阻止することは出来ない、だからこそ、この犯罪をすでに既成の事実とみなそうと考えたのか？

ミュラーは、さらに読みすすむ前に深い溜息をついた----後でも、まるで激しい動揺に見舞われた人のように、何度となく溜息をつきながら、手の拳を握りしめたのである。

『もはや誰一人、私を救い出すことは出来ないだろう。しかしひょっとして、仇は打てるかもしれない。だから私はこうして、出発以来、経験したことを書き留めている。』このように、奇妙な表題の下には書かれていた。そこまでミュラーが読み進んできたとき、フォン・マイリンゲン氏が部屋に入ってきた。

『アムスターとお話になりますか？ちょうど今、戻ってきたところです』と、親しげに警部は尋ねた。

ミュラーは素早く立ち上がった。

『もちろんです。それで、あなたは近くの停留所や汽車の停車場には、どこにも電報を打たれましたね？』

『もちろんですとも』と、警部は笑みを浮かべながら答え、次のように付け加えた。『警察の派出所にも、すべてに。』

『それから病院----それに、いろんな精神病院。』

『そこにはしていません。』

フォン・マイリンゲン氏は顔を赤らめたが、それは彼にお似合いだった。そうして、すぐさま部屋を出て、自分のミスを帳消しにするのが、もっとお似合いのことだった----その間、アムスターはミュラーに、短い報告、だが残念なことにそれほど重要でもない報告を繰り返していた。

ミュラーはそのすぐ後でまた、茶色っぽいメモ帳の前に腰を下ろし、読みだした。

水曜日、本当に今日は水曜日なのかどうか？彼女は私に今日、水曜日、11月20日の新聞を持ってきた。その新聞は、新しい印刷用黒インクのような臭いがした。しかし----ここは、確かにとても湿っぽい----だから、新聞もずっと古いものかもしれない。そんな訳で、いつの日から書き始めたのか、全然わからない。それに病気だったのは、ほんの数日間なのか、あるいは数週間だったのかもわからない。どこか具合が悪かったのかどうかも、ちっともわからない。わかっているのは意識不明だったということと、最初、またはっきり考えられるようになって、自分がこの陰気な部屋にいるということだけだった。

私の側には、医者も居たのかどうか？今日まで、年老いた女性以外、誰一人見ていないし、その老女の名前も知らない。それに、彼女は私と話すこともない。普段は親切だ。にもかかわらず、彼女の厳しい顔つきが恐ろしいし、その微笑みも怖い。私のいろんな質問や願い事に対して、笑顔で答えてはくれるけれど。

『あなたは病気です。』

これがかって私に言われた唯一の言葉だ。そう言いながら、彼女は額を指さした。

だから、彼女は私を気違いだと考えているか、少なくとも、そうだと信じているかのように振る舞う。

彼女の声は、何という嗄れ声だろう！普通の時でも病気なのに違いない。一晩中、咳をしているのだから。それが壁越しに聞こえる。彼女は隣の部屋にいる。しかし私は---私は病気じゃないし、彼女が仄めかすような状態でもない。熱はもうない。脈拍は一定で落ち着いている。彼らが置いてくれた時計で、脈を測ってみた。それに、どんなことでも思い出せる。取るに足らぬ出来事でも---あれを駐車場で飲むまでは。

恐らく、紅茶の中に何かが入っていたのだろう？私の旅の道連れが---その事に、気付くべきだったのに---かなりしっこく、それを勧めたのだから。

それに、あの男は何者だったのだろうか？

とても丁寧で面倒見がよくて、父親みたいだった。あの時から二度と会っていないが、それでもあいつこそ、私が生きては二度と戻れぬ、この罠に誘い込んだ奴だという気がする。あいつのことを書いておくことにしよう。とても背が高く、肥満体で金髪だ。そして濃い髭、すでに白髪が混じった髭をはやしている。右の頬には、髭が顔中に広がっているにもかかわらず、傷跡がある。私はそれに気付いたのだ。防塵用ゴーグルが、両眼を隠していた。声は小さく、ソフトだ。物腰は申し分のないものだ---他人の紅茶に、麻酔剤、あるいはひょっとして、まさしく毒物を入れるまでは。

私は苦しまなかった---あるいは鈍い麻酔状態のために、そのことを忘れてしまった。頭の回りに、まるで鉄の輪が嵌まっているような気分だったことは、今でもまだ覚えている。しかし何と言おうと、私は気違いなんかじゃない。私を悩ませる不安は、妄想なんかじゃない。私を取り巻いている、本当の危険のせいだ。私はお腹がすいている、しかし、何かを食べるようなことはしない。お茶の時間に、持ってきてくれる卵の他には。卵の中には、何も入れることは出来ないのだから。昨日、スープを試しに飲んでみたら、まるで知らない味がするように思えた。その時から、疑わしい食事は、みんな脇へ除けておくことにしている。

人殺したちがやって来ても、少なくとも意識は失わないようにしていきたい。毒なんかで、この世からおさらばなんてことは、させやしない。

一昨日の夕方だったが、目覚めてすっかり意識を取り戻したとき、ベッドの横の小さなテーブルに一通の手紙が見つかった。それはフランス語で書かれていた。

私の見知らぬ字体で、サインはなかった。

この謎めいた手紙には、私への要求が書かれていた。つまり、私が後見人に宛てた書簡、簡潔で読みやすい手紙の中で、誰にも打ち明けたくない理由から、自殺したのだと述べるように、勧めていた。もしそうすれば、現在の滞在地をもっと快適な場所に変更し、まもなく、すっかり自由の身になれるだろう----もし言う通りにしなければ、本当にお前をこの世から抹殺するだろうと。

ペンとインクと紙が、返事に用意されていた。

『絶対いや』と、私は書いた----その後で、身の毛もよだつ、謎めいた自分の運命に対する絶望的な気持ちに捕らえられた。その時には、本当に気違い女に似ていたのかもしれない。突然、年老いた女が目の前に立っていた。私は懇願し、哀訴し、脅しの言葉を出した。彼女は冷静なままだった。ぶちのめされて、私は寢床に沈みこんだ。すると、彼女は私の顔に湿った布ぎれをかけた。何か私の知らない臭いがした。私は眠り込んだ。その時には、彼女の他にもう一人の人物が部屋にいたと思う。あるいは、老女は独りごとを言っていたのか？翌朝、手紙も私の返事も書き物道具もなくなっていた。

たぶん、私が推測した通りだった。つまり、第二の人物が私の側にいた。鉄道馬車でやってきた人物だ。

朝、目を覚ましたとき、書き物机の横のカーペットの上に、路面電車の切符が落ちていた。私はそれを拾い上げた---- ----

今では、今日が日曜日だとはっきりわかる。最後から3番目、つまり意識をなくして3日目の夕方から、意識ははっきりしている。その頃、外の世界から聞こえてきた最初の印は、霧笛の音だった。近くに工場があるに違いない。霧笛が鳴ったとき、作り付けの悪い窓ガラスが、がたびし震えた。

朝も昼も夕方も、人の大声が聞こえる----平日には。今日は聞こえなかった----だから日曜日だ。11月18日の月曜日に、私はここへやって来た。到着したのは夕方だった（ここへだって！----一体どこにいるのか、自分にはわかっているだろうか？）。つまり、私は首都へ向かう汽車に乗り込んだ。そして、まさしく首都の北駅に到着したのだ。

私は寒くて、気分が悪かった----その時、あいつが私に紅茶を差し出した。そして----その後、何が起きたのか？私はどこにいるのか？11月20日が過ぎて、これは確かなことだが、水曜日の新聞が与えられた。ケアレスミスからか？意図してのことか？そして今日は日曜日だ---- ----旅立ってから始めての日曜日？私にはわからない。ただわかっているのは、11月18日に旅に出たということだけ。成年に達する前に、人のいい後見人と最後の話し合いをするために----そして、私は何者かの手に落ちた。私が消えていなくなることに、関心を抱く何者かの手に。

私に邪魔が入った。老女に訪問者だ。一人の男が彼女のもとへやって来た。二人は争っていた。私のことが問題になっていた。私は聞き耳をたてた。男が指図していたことを、彼女はしたくないのだ。男は出て行くように命令した、しかし彼女は

逆らっていた。男は何を意図しているのか？彼女は、私を一人にしておきたくないのだ。私はもう彼女を憎んでいない。彼女は必ずしも悪くはない。そもそも彼女は悪い人間だろうか？私が居ない所でも、彼女は私のことをまるで気違いみたいに話しているのが、聞いていてわかった。だから本当に、私を病気だと思っている----恐らくは被害妄想に苦しんでいるのだと。

男は出ていったとき、腹を立てているに違いなかった----階段をドタドタと降りていったが、男の不用意な足もとで、階段もぎしぎしと音をたてた。だから、階段は木で出来ている----それを、今日になってはじめて知った。

今日のところは、多分あの男に対しては安全だろう。だけど恐怖心で、まるで病気だ。やっぱり私は、気が狂っているのか？ひとつだけ、書き留めるのを忘れていた。初めて元気になったとき、自分の傍らに一枚の紙切れを見つけた。その内容が語るところでは、私が事情によっては、死の手に委ねられるということだった。『外から助けを呼び寄せたりしないように、注意せよ。叫び声----それでおまえの命は終わりだ。』----これも、フランス語で書かれていた。何故だろう？老女が読めないようにしたからだろうか？その紙切れの存在を、彼女は知っていた。というのも、私からそれを取り上げたのだから。----そのことを書き留めるのを、今まで忘れていた。これは、私を不安な気持ちにさせる。ひょっとして、私はやはり病気ののだろうか？もし、まだそうじゃないとしても----こんな不安でいっぱい孤独感では、病気になるかもしれない。

なんて悲しげなんだろう、私の部屋は----私の牢獄は！

それになんと嫌らしい、風変わりな壁紙なんだろう、この部屋は！私はこの壁紙を一枚はがし取った。そして、このメモ帳に隠しておこう。ひょっとしたら、この壁紙がいつか誰かに告げてくれるかもしれない。どこで私が苦しみ----死んだかを。こんな模様の壁紙を買った人間なんて、きっとほんの僅かだ。だから、これが作られた工場を発見できるだろう。格子窓から見える物も書いておこう。ずっと下の方に錆びた屋根----恐らく物置の一部だろう。前方、右手に、家の裏側の窓のない外壁。左手の方には----緑っぽくなり、ほっそりした教会の塔の先端。それは、恐らく銅メッキがしてあるのだろう。そして塔のちょっと前に、高さが違う二本のイタリアのポプラの木。

再び一日が過ぎた。えぐるような不安一杯の一日が！やっぱり私は気が狂っているのだろうか？視覚障害を煩っているのか？午前中のことだったが、偶然窓の方に視線をやると、そこに一羽のオウムが止まっていた。はっきりとオウムが見えた。オウムは赤と緑の羽を逆立て、私をじっと見つめていた。長いこと、私はそちらを見据えていた----しかし突然オウムはいなくなった。私は寒気がした。やっと勇気を奮い立たせて、窓辺に歩み寄った。もし鳥が本当にそこにいたのなら、出窓を覆っていた雪の中に、痕跡が残っていたはずだ。そこには何も残っていなかった。もちろん、外は風が吹いていた。しかし、こんなにも素早く----風がこんなにも素早く、この痕跡を消し去るものだろうか----あるいは、単に私の想像力----私の病んだ想像力のせいで、南方の鳥を雪の中に見たのだろうか？火曜日だ----今からは一日一日----私にまだ残された日を数えることにしよう。

今朝、私は老女にオウムのことを尋ねた。彼女は微笑んだだけだった。今度はその微笑に、身の毛がよだった。自分の身に降りかかっている犯罪だと思っているものは、ひょっとすると一種の必然的なもの以外の何物でもない、という考えに満たされて、私は恐怖心に捕らえられた。私は牢獄にいるのだろうか？あるいは、この部屋は狂人用の独房なのか？私は悪党の犠牲者なのか。あるいは単なる、哀れな---ああ---なんと哀れな病人にすぎないのか？脈は早鐘のように打っている---しかしそれでも、落ち着いて---すっかり落ち着いて、自分自身を観察した。私の記憶は損なわれていない。まだはっきりと自分の生涯を見渡せる---そして私の判断力は---ああ、もしちゃんとわかれば。つまり物事に対する判断力が、まだまだ自分にはあるのだということが！

ちょうど今、彼女は頭を振りながら、食事を片づけたところだ。これから先は、卵だけ持ってくるように頼んだ。他の物には箸をつけないと。彼女はそれを約束してくれた。

私の搜索は、すでに行われているのだろうか？私の後見人は、金物工場経営者のテオドル・フェルナーだ。ドームガッセ 14 番地が住所だ。そして私はアスタ・ランゲンという名前だ。

私は旅行用小荷物を取り上げられた---服のポケットに、メモ帳を入れていて本当によかった。メモ帳と小びんの香水だけが、彼らが見逃した唯一の物だ。それに本当によかった---私の部屋にある書き物机の引き出しに、この古いペンと、更に少しばかりインクが見つかったのは。

水曜日。再び、見知らぬ男がここへやって来た。今日は、彼のソフトな声を聞いたと思う。男は、私の付き添い女と廊下で話していた。もちろん私は聞き耳をたてた。しかしほんの二つ三つ、言葉がわかっただけだった。『明日の夕方』---『迎えに来る。』『責任はない。』---これらの言葉は私と関係するのだろうか？---そしてもしそうなら？---どこへ私は連れて行かれるのだろうか？だとしたら彼らは思い切った行動は取らないのか---私をここで殺すことは？頭はかっとなえ立つようだ。4 日前から一滴も水分は取っていない。唇はひからびたみたいだ。私はあえて何か食べるようなことはしていない。あいつたちが、麻酔剤とか毒物を入れることが出来るような物は。

しかし、誰が私の死に関心を抱いたりするのだろうか？成人になったとき、私に引き渡される財産のせいで、この危険に引き込まれたなんて有り得ない。だって私が死ねば、父の遺言状の規定で、財産は福祉施設の所有するところとなる。そもそも私には親戚、つまり相続権のある親類縁者はもう居ないのだから。

だから誰が---私は誰にも悪いことはしていないのだから---私の死を願ったり出来るだろうか？--- --- ---

何者かが彼女のもとに来ている。---私のドアのところに、人が居た。私にはこう思われた---まるで見張られているかのように。そんなことが出来るのだろうか？

私はドアを調べてみた。どこにも隙間はない。それに鍵は抜き取られていなかった。それにもかかわらず、燃えるような眼差しが、私に向けられているのを感じた。私は体がこわばった。ああ----あのオウムだ！----私の感覚までも、錯覚に捕らえられるのだろうか？神様！直ぐにも裁きをつけて下さい。私はまだすっかり錯乱しているわけじゃない----だけど、どれくらい続くのだろうか。私を取り捲いている、この漠然とした身の毛のよだつような物のせいで、すっかり気が狂ってしまうまでには。とんでもない、真っ平ごめんだわ----そんなことはきっと防いでみせる。

木曜日。私の旅行鞆がまた返却された。世話係の老女は落ち着きがない。今日はいつもより長く私の所にいた。部屋の掃除も躊躇らっていた。私に何か言いたさそうだったが、やはりやめにしてみたかった。とうとう彼女は部屋を出て行った。

だから今日は、私に対して何かが実行されるはずだ！一晩中、私は目を閉じることが出来なかった。身体的な手段によって誰かを気違いにするなんて、有り得ることだろうか？不安だけで気違いになるなんて、私の場合ありえない。だとすると私の敵は計算違いをしたのだ。私の肉体を殺すことだけはできようが。----

これが、アスタ・ランゲンがメモ帳に書き残した最後の言葉だった。極めて辛い苦境の中で、唯一頼れるものとなっていたメモ帳に。

探偵のミュラーは、彼独自のやり方でメモ帳を読み終えると、数分間、目を閉じていた。実際、熟睡している人みたいだったが、頭の中は、今ほど活発に働いているときはなかった。読んだ物がひと続きになって通り過ぎるのに任せながら、一番重要なものを、はっきりした像として手元に留めようとしていたのだから。

今、ミュラーは立ち上がって、ハンガーからオーバーを取った。オーバーを着ると、警部の部屋にはいり、そこに置いていた帽子とステッキに手を伸ばした。

『どちらへ、ミュラーさん』と、フォン・マイリングゲン氏は尋ねた。

『ドームガッセにです、もし許して頂けるなら。』

『今からですか？ 11時過ぎ 15分ですよ。ことは、急を要するとおっしゃるんですか？どの停車場からも、もう汽車は出ません。それに見張りのゲルフルが、ドームガッセには立っています。住所がわかってから。また、フェルナーは立派な信用できる男として有名だというのも、すでに私にはわかっています。』

『私たちの間でも、少なからぬ者がかなり長い間、立派な男として通用しています。その男について、もっと詳しいことが、ちゃんとわかるまでは』と、探偵のミュラーは気持ちよさそうに答えた。

『だとすると、フェルナーについてもっと詳しく知りたいわけですか？』と、警部は微笑んだ。ミュラーは答えた、『そういうことです。』

『しかも、まだ今日のうちにですか？』

『まだ今日のうちにね。寝ぼけ眼の真っ最中なら、当の人物について一番正しい印象が掴めるものですよ。よくあることです。』

一分後には、ミュラーは出発した。メモ帳を、ミュラーはフォン・マイリンゲン氏に手渡していた.....

激しく雪が降っていた。そして氷のような北風が、ひゅうと通りから吹きつけてきた。ミュラーは上着の衿を立て先を急いだ。ミュラーがドームガッセにはいりこんだ時、ちょうど 11 時 45 分の鐘が鳴った。ゆっくりと、ミュラーは月明かりに照らし出されている家並みのそばを歩いていった。その時、影になっている側から、一人の男がミュラーを出迎えた。見張りのデルフルだった。デルフルはミュラーと同じく私服だった。

『どうかね?』と、ミュラーは尋ねた。

『何も新しいことはありません。フェルナー氏は数日前から伏せっています。病氣なんです。家の管理人の話では、かなりの重病です。管理人は、主人について大層真心のこもった話しをしてくれました。』

『まあいいだろう----どういう質の人間なのか、その内わかるだろう。もう帰っていいよ、デルフル。とにかく、足が凍りついてしまう位だったろうな。』

握手をして、デルフルは立ち去った。ミュラーは 14 番地の標札の掛かった家をじっと観察した。素晴らしい古風な作りで、真に名門の家だった。こんな家になら人々は信頼を寄せることが出来る。しかし、そのことがミュラーを感じ入らせることはなかった。彼にはとっくの昔にわかっていることだった。つまり、このような家の中にも時には犯罪が巣くっているし、目の前に姿を見せしている、堅固極まりない表門や、居心地よさそうな彫刻も信用出来ないものだということが。だからミュラーは、今無慈悲ともいえる表情で、用心深げに呼び鈴を引いた。出来るだけ騒々しくならないようにしたかった----ただ管理人だけに、その間、呼び鈴を聞いてもらえばよかったのだ。

数分後、ミュラーは管理人の男と二階へ上がっていった。

男は、真夜中に見知らぬ人間が主人に会いたがっても、全然訝しがらなかった。

『ああ----きっと電信局の方なんですね。さあ、おはいり下さい。既に命じられておりますから。』

こう言いながら、その老人はミュラーを迎え入れた。この事からミュラーが推測したところでは、テオドール・フェルナー氏の良心には、やはり、ほとんどやましい所はないということだった----というのも、恐らく待ち望まれていた電報は、アスタ・ランゲンが来れなくなったことと関係していただろう。だとすると、後見人はひょっとすると、彼女の酷い苦境については、やはり何も知らなかったのだ。

こんな事はどうでもいい----いずれにしても、ミュラーはフェルナーと話しをしてみなければならなかった----話してみても、じっと観察することだ。

管理人の男は、ドアのひとつをノックした。すると間もなく、老婦人によってドアが開けられた。

『で、どうしたの?』と、彼女はまだ寝ぼけ眼で尋ねた。『電報が来たんですか?』

『そうです』と、管理人は答えた。

『違います』と、ミュラーは口をはさんだ。『だが、私はフェルナー氏とお話ししなきゃならないんです。』

二人の老人はミュラーをじっと見つめた。

『話しをするですって?』と、女の方は頭を振りながら応じ、急いでこう付け加えた。『ランゲンお嬢さまについてですか?』

『ええ、そうです。お願いします----御主人を起こして下さい。』

『だけど、主人は病気です。それにドクターが---- ----』

『それでもやはり、御主人を起こして下さい----私が責任を取ります。』

『一体、あなたはどなたですか?』と、管理人が今や割ってはいった。

ミュラーは、人を信用し過ぎる老管理人の、少しばかり遅すぎた警戒心を冷たく笑いながら、こう答えた。『私が何者なのかは、フェルナー氏に申し上げます。だが今から、奥様----急いで下さい。実際、お嬢様のことが問題なのです。』ミュラーの顔付きは、そう言いながら、大層真剣に見えた----すごく真面目な顔付きだったので、婦人は事実、もう長く思い煩うことはなかった。ミュラーに中へはいるように命じ、それからドアを後ろにすると姿を消した。

彼女はランプを取ってきた。そして、そのランプを持って出て行った。管理人は自分のランプを控えの間に置き、それから半ば疑わしそうな、半ば心配そうな眼差しでミュラーをじっと見つめた。

『あなたは、よくない知らせを持ってきたんですね!』と、暫くしてから管理人の男は言った。

『そういうことです。私はよくない知らせを持ってきました。』

『それなら、私どもの可愛いお嬢様に、何か起きたんですか?』

『だとすると、アスタ・ランゲン嬢とその家族のことを知ってるんですか?』

『勿論です。いろんな恐ろしい事件が起きた時、その場に居合わせたんです。』

『どんな事件です？』

『ええまあ----離婚----そして----しかし----あなたは余所者ですし----だから、そういう家族のことについて話しをするのは、私には不適當です。むしろ、お嬢様に何が起きたかを、言ってもらいたいんですが？』

『それは差し当たり、御主人に申し述べなきゃならぬことでしょう。』

この瞬間、婦人が戻ってきてミュラーにこう言った。『おはいりになれます。ベルナー、あなたはここにいて下さい。この方がまたお帰りになるまで。』

ミュラーは婦人に従い、いろんな部屋を通り抜け、大きな寝室にはいりこんだ。そこには見たところ、病気の男がベッドに横たわっていた。

『どなたですか？』と、病人は起き上がりながら尋ねた。婦人は部屋を出て行き、ドアを閉めていた。

『ミュラーです----探偵です。ここに私の信任状があります。』

フェルナーは、それを急いでさっと見た。

『で、どうして警察は私のところへ人を寄越すんですか？』

『あなたが後見人になっていらっしゃる方のことなんです。』

『ああ！』

フェルナーは今やベッドに座っていた。彼は話すとき、身を乗り出すようにした。『アスタは----アスタの財産管理者の手紙で、ようやく今日になってわかりましたが----老人はそう言いながら、ナイトテーブルの上にあった一通の手紙を指し示した----11月18日に、私を訪ねようと旅に出たのです。----18日の夕方には、ここに着いていたはずですが、旅行に出てから11日目になるのに、今日迄まだここに到着していません。』

『あなたはお嬢さんを待ってらっしゃったんですね？』

『私には、アスタが12月3日になる前には、やって来るだろうというのだけは、わかっていました。24回目の誕生日を、私の所で祝うためですが。』

『お嬢さんは、来ることを前もって知らせないのが、いつものことだったのですか？』

『ええ、驚かすのが好きでした。しかし3日前、電報で注意させました。決済に

必要ないろんな書類を持ってくるようにと。そこで、既に言いましたように、アスタの管財人が返事をくれたのです。その返事で、私は大変心配になり、今日一日を過ごしていたわけです----心配しているところへ、あなたがおいでになって、不安な気持ちが一層強まりました。それというのも、私が恐れているのは----』病人は、いかにも可哀想だった。そしてミュラーは、フェルナーの氷のような手が自分の手に触れたとき、優しい気持ちにさえなった。病人の今やかすれた声が、呟くようにこう言った。『話して下さい。----アスタは死んだのですか？』

探偵は肩をすくめた。

『そのことはわかりません。今晚 8 時半頃には、まだ彼女は消息を伝えることが出来ました。』

『誰にです？』

『近くの警察署にです。』この後、ミュラーは探りだした事を手短かに話した。

それを聞きながら、老人は途方に暮れ、ぎくりとしているようだった。だから探偵のミュラーは、この老人に対する疑いの念を、きれいに捨て去ったほどだった。

『それは謎めいてますね』と、病人は探偵が黙り込むと、どもるように言いながら額の汗を拭った。

『私の質問に、二つ三つ答えていただけませんか？』と、ミュラーは尋ねた。すると老紳士は熱心に応じた。『どんな質問でも、もちろんどんな問いにも答えましょう。』

『アスタお嬢さんは、金持ちなんでしょう？』

『30 万グルデンの資産を好きなように使えますし、いろんな不動産もあります。』

『親戚の人がいるんでしょう？』

『いません』と、フェルナーはきっぱりと答えたが、その時ある考えが頭の中に閃いたようで、再び突然ベッドに起きあがると、呟くようにこう言った。『いやいや----ひとり親戚がいます、腹違いの兄ですが。』

『ああ----』と、探偵のミュラーはびっくりして、思わず口に出した。

『何故、そんなに驚かれるんですか？』と、フェルナーは訝しそうに尋ねざるを得なかった。

『お嬢さんは、メモ帳から推測しますと、この事情をご存知じゃないですね。』

『このことは、知りません。アスタが生まれる前のことですが、ある醜い家族の

物語がありました。アスタの父親が、まだドイツに住んでいた時のことです。父親は最初の妻とその息子を、ある日、追いだしたのです。妻の、何というか、ふしだらな関係に気付いていたのです。それに息子は当時、医学生でしたが、金を盗んでいたのです----そんなわけで、ランゲンは、後々発見されたものから推量して、息子が本当に自分の息子なのかを疑っていました。身の毛もよだつような場面が演じられました。そしてこの後、二人はお互いを思いやることもなく、遠く離れてしまいました。妻の方は間もなく亡くなり、若者はオーストラリアに出かけて行きました。そこで、恐らくすっかり落ちぶれ果てたことでしょう。』

『もし、またヨーロッパで金持ちになるいい機会を待ち望むなんてことが、とっくの昔になくなっていればのことですが。』

再び、フェルナーの手は、訪ねてきた男、ミュラーの手の上に置かれた。2人の男の目は、お互いを食い入るようにじっと見つめ合った。老紳士の目は救いような恐怖の表情を示し、探偵のそれは、きらきら輝いていた。ミュラーは静かに言った。

『そのお話しで、手掛かりを掴めます。他の誰が、アスタ嬢の死に関心を抱くのでしょうか？』

『エーゴン・ランゲン以外の誰も。もし、この名前を名乗る権利があればのことですが----それに、まだ生きていればの話しですが。』

『大体のところ何歳ぐらいでしょうか？』

『40歳前後でしょう。父のランゲンは、かなり長い間独身でしたが、そのあと再婚したのです。』

『あなたは、エーゴンを個人的に知っておられたのですか？』

『いいえ。』

『ランゲン嬢の写真は、お持ちですね？』

フェルナーは呼び鈴を鳴らした。ベルナーがはいって来た。

『この方に、アスタの写真差し上げなさい。私の書き物机にある、銀色の額縁の写真。』

老主人の声の響きは親しげだったが、ひどく疲れてもいた。そのため、忠実な召使いのベルナーは、とても心配そうな様子で主人を見つめた。

ベルナーは部屋を出ていくと、その後、すぐに又戻ってきたが、可愛らしい賢そうな少女の人物写真を手にしていた。ミュラーは額縁から写真を取り出すと、それを懷にしまった。

『お引き取り下さい----けれど、又おいでになりますね----直ぐにでも。』

ミュラーは、フェルナーに領いてみせた----フェルナーの方は、すでにミュラーの手を掴んでいた。そしてしっかりと握りしめた。その時、一粒の涙が白髪混じりの髭を伝わって落ちた。そしてミュラーが立ち去った後も、なお長い間、老主人は物思わしげな顔付きで、ベッドに横たわっていた。

ベルナーはその間に、夜の訪問者を表門へ案内した。表門の鍵を内側からおろそうとした丁度その時、ミュラーがこう言った。『エーゴン・ランゲンの右頬には、恐らく、決闘のひどい傷跡があるんでしょうね？』

ベルナーの目は、言葉で表現しようのない驚きの表情をみせた。この余所者の男は、今どうしてこのような質問をするのだろうか？そもそも今日になって、何故、このすっかり消息の知れない名前が、口をついて出たのだろうか？『ええ----その通りです----がしかし、どこでその事をお知りになったのですか？』と、頭の中が混乱しながら、ベルナーは呟いた。返事はなかった。ミュラーはすでに道に出ていた。そして大急ぎで坂を下っていった。しばらく老人はミュラーをじっと見送っていた----それから突然、膝ががくがくと震え始めるのを感じた。やっとの思いで戸口を閉めると、その後、廊下のベンチに腰を下ろさざるを得なかった。そして、萎びた唇から、囁くような声が出された。『恐ろしいことだ！兄が妹の敵であるなんて！』 ----

翌日の朝は、晴れたよい天気で明けた。それに気付いた最初の人物は、ミュラーだった。それというのも、フォン・マイリングゲン氏に報告した後、ミュラーは派出所の小部屋で、ほんの何時間かしか眠っていなかったし、その後で、寒い冬の朝の中へ出かけていた。近くの街角で、ミュラーを待ち受けていたのは、ある小さな驚きだった。そこでアムスターが歩み寄ってきた。

『ここで、いったい何をしているんですか？』と、ミュラーは訝しそうに尋ねた。

アムスターは微笑んだ。『お話ししたいことがあるんです。』

『そうですか？』

『警部殿が、きのう私に尋ねられたんです。緑の先端を持つ細い塔を、ここで知っていないかと。それに塔の前に、2本のポプラの木が立っている所を。』

『さて、それで----』と、ミュラーは今やとても興味をそそられたようだった。

『これは、フランシスコ会修道女のいる修道院聖堂にぴったりだと、思い当たったんです----しかし、それについて詳しいことは知りませんでした----だから、一時間前に、そこへ行ってみました----そして今はっきりしましたが、すべてが一致しています。それに、事は昨夜の事件に関係していると考えたので、あなたが不必要な一時停車をしないでいいようにと思いました----そしてこの事を報告しようと。』

私はちょうど警察署に行くところでした。』

『それを思いついたのは、大変結構。それで、我々は時間の余裕ができた。今から行くとしよう。我々の目標は差し当たり、その教会ってことですな。』

ミュラーは、決して多くを語る気はなかった。まさしく今のように、様々な考えが脳髓の中を駆け巡っているときには、言葉は極端に少なかった。

大急ぎで、二人はその教会目指して歩いて行った。およそ半時間後には小さな広場に着いたが、その中央には古い教会が建っていた。教会の前には、まるで二人の巨人が見張りをしているかのように、一対のピラミッド型のポプラの木が聳えていた。そのうちの一本は病気にかかり、いびつな格好をしており、隣の木よりかなり低かった。ミュラーは満足して頷いた。

『これが、警部殿がお尋ねになった教会でしょうか？』と、アムスターが質問した。『この教会です』というのが、返事だった。そう答えて、ミュラーは小さな家に向かって進んで行った。その家は修道院聖堂に続いていたが、ミュラーが推測したとおり、助任司祭が住んでいて礼拝の準備をしていた。

探偵は、それほど利口そうでもない太鼓腹の寺男に、自分を旅行者だと名乗った。この教会の塔からの眺めを、特別勧められて、やって来たのだと。きらきら光るグルデン硬貨をもらい、堂々たる貫禄の、寺男の疑いの念はすべて吹き飛んだ。街の眺めを、いつご覧になりたいのでしょうと、いかにも親切そうに、寺男は尋ねた。

『すぐにも』というのが返事だった。寺男はその返事に満足したが、それというのも、教会は一時間後によく開けられるからだだった。だから今なら、余所者の旅行者も、誰にも面倒をかけることはなかった。

寺男は鍵の束を手に取り、二人に、後について来るようにと招いた。数分後、ミュラーと連れのアムスターは、ほっそりした塔の、ごく小さな鐘楼に立っていた。太った寺男は、チップをくれたミュラーの要求通り、喜んで下に留まった。

ミュラーは、順番に4つの天窓付近まで近寄ってみた。四方に向かって開いている天窓で、町や村に鐘が響き渡るようになっていた。東の方角にある天窓の方へ、もう一度歩み寄ったとき、その天窓から、ちょうど今、城壁の上に昇っている太陽が、余りにも明るすぎるといえる位の光を投げかけていたが、ミュラーの目を引く何かがあるように思えた。アムスターにこちらへ来るように合図をし、外の方を指差した。

『あんたの目は、私の目より20歳若いんだから、代わりに見てもらえませんか。あの向こうの右手の方だが、何が見えますか？火の粉止めのついた、工場の煙突のすぐ横の所だが？』

アムスターは、指差された方向を鋭い目付きで眺め、こう話しだした。『その煙突の右手に、高い建物があります。この建物の後ろの壁のそばに、煙突が立ってい

ます。この建物は、新築の他の住居の間で、にっちもさっちもいかない感じです。とても古い建物で、隣近所の家よりずっと品のいい家です。近所の家には、装飾などありません。しかし例の家には、彫像があります----その彫像に雪が積もっています。しかし、家の手入れはよくありません。私たちの方を向いている側面の外壁には、ひび割れがあります。』

『それで、窓は？』

『見る事が出来ません----が窓は、中庭に通じています。ここからいえば、後ろの右手の方ですが、他の家の防火壁によって出来上がっている中庭に。』

『それで、前の方へは？』

『もっと低い外壁があって、それが、荒れ放題の路地へ通じている中庭を取り囲んでいます。』

『その外壁は私にも見える。ほぼ、庭と敷地だけで出来ている奴ですね。』

『その通りです。』

『ぴったりだ』と、ミュラーは満足そうに言った。

その満足げな顔で、ミュラーは暫くの間、自発的に自分の仲間になった同行者、アムスターをじっと見つめた。それから急いで、ぎいぎい音をたてる塔の階段を、下へ降りて行った。アムスターもミュラーに従った。

『あの家に出かけるんですね？』と、2人が路上にでた時、アムスターが尋ねた。ミュラーは頷いた。

一度として躊躇うことなく、二人の男は、最近できたばかりの貧弱で、何の特徴もない街路の雑踏をかき分けて行った。そしておよそ 10 分後には、古い、3 階建ての建物、路地に向かっては 4 つしか窓のない建物の前に立った。

『ここは多分、建物の右手に当たるんでしょう』と、アムスターが言った。

『私たちは右手にいます』と、探偵はきっぱりした調子で答えた。そして高く、品のいい表門とロココ風の彫像をじっと観察した。

ミュラーはもう右手を挙げて、錆び付いた呼び鈴を引こうとしたが、しかし再び手をおろした。

ミュラーはちょうど今、偶然脇へ視線をやったが、隣の家の外壁で、何か大きな字で書かれた張り紙が、半ば引き剥がれそうになりながら風にはためいていた。ミュラーはこの紙切れの所へ歩み寄ると、ステッキでしっかり押さえつけた。

『ぴったりだ』と、ミュラーは何行かそれを読んだ後、再び言った。アムスターもその張り紙に視線を投げかけていたが、その内容が誘拐された女性の事件と、どんな関係があるのかわからず、不思議そうな面もちで頭を横に振った。するとミュラーは呼び鈴を引きながら、こう言った。『我々が探している女性は、間違いではありません。』

だがその紙片には、逃げた赤・緑のオウムを連れ戻してくれた人に、10 グルデンの賞金を約束すると書かれていた。

かなりの間をおいた後、ようやく門がガラガラといいながら開いた。そして、手入れの行き届かぬ頭をした老婦人が現れた。

『何の御用ですか？』と、二人の男に疑わしそうな視線を投げかけ、老婆はかすれた声で尋ねた。

『私たちを中へ入れて下さい。そして家の鍵を貸してもらいましょう。それに、上へ案内してもらえませんか。』

ミュラーの話し振りは実際優しそうだったが、にもかかわらず、婦人の顔色は青ざめた。

『どなたですか？』と、今やどもるように女は聞いた。ミュラーは上着を後ろへ跳ね退けるようにすると、帝国の鷲の紋章をみせた。

『私が望んでいることを、今からやってもらえますね？』

『しかし、ここには私以外には誰もいません。この家には、人は住んでいません。』

『昨晚は、まだここに女性がひとりと殿方がひとりいましたね。』---老女はミュラーに物怖じするような眼差しを向け、それから自信のない声でこう言った。『あの女性は気が狂っています。現在は病院にいます。』

『そう、あの男があなたに言ったんでしょう。犯罪者のあの男が。』

『おはいり下さい』と、老女は呟くように言うと、鍵をミュラーに渡し足を引きずりながら先へ進んだ。今や、もう何も否定できず、言い訳もできないことを悟ったのだ。

家は内側から錠がおろされ、アムスターは玄関に留まった。ミュラーは老婆の後について、階段を上がった。3 階へ行く階段の踊り場は、木でできていた。この家は大層古い家に違いなかった。低い天井や隅の多い家の作りも、そのことを示していた。

老女はミュラーを例の部屋へ案内した。見知らぬ婦人を、その『夫』の依頼で、精神病院に収容出来るまで、大切に世話していた部屋である。壁紙をちらと眺め、

また窓から外を眺めて----ミューラーには、アスタ・ランゲンが本当にこの部屋にいたことがわかった。肘かけ椅子に腰を下ろすと、ミューラーは狼狽しきっている老婆の顔をのぞき込んだ。

『どこへ女性が連れ去られたのか、知っていますか？』

『いいえ。』

『男性の名前は知っていますか？』

『いいえ。』

『女性の名は知らされていなかったんですね？』

『ええ。』

『一体、面倒なことになると心配しなかったんですか？』

『あの方は、私にちゃんとお金を払ってくれましたし、悪いことを計画しているなんて考えもしませんでした。それに----それに----』

『悪いことが行われていて、共犯者になるかもしれないとは思わなかった』と、ミューラーは老女を怒鳴りつけた。

『私はあの女性を、いつも親切に扱いました。』

『わかっています。』

『それじゃあ、女性は夫のもとから逃げたんですか？』

『あいつは夫ではなかった。だが、今は隠しだてはしないで下さい。あなたが更にこれ以上、罪を背負い込まないためにも。いつからあの男を知っているんですか？』

老女は打ちのめされたようだった----気を落ち付けようと長いこと努力した後、ようやく又話せるようになって、こう語り始めた。『あの方は11月1日に、この部屋を自分用にお借りになりました。つまり連れ込み宿として。しかし利用は、ほんの二回だけでした。ここに住むことになった女性を、連れておいでになるまでは。連れてこられた女性は病気でした。重病でした。ここには運び上げられたのです。私は医者と呼ばれに行こうとしました----しかしあの方は、自分は医者だ、それでよくこんな発作を起こす妻を、自分で診察していると言われました。私が病人をベッドに寝かせた後、妻のための薬を手渡されました。その点滴剤を少しだけ飲ませました----だがしかし、長いこと麻酔状態から醒めることはありませんでした。』

『とにかくするうちに、あの方はこう言われました。妻は正気ではなく、記憶も失

っているし、被害妄想にかかっている。また妻の状態が悪化しているので、病院に入れねばならないと。適当な所を見つけるまで、私に見張ってもらいたいと。一度あの方は、うっかり拳銃をここに置いたままにされたことがありました----しかし、女性には隠しておきました。そして、あの方が又ピストルを探し出そうとされたので、それをお返ししました。そのことに腹を立てていらっしやいました----何故なのか私にはわかりません。そして拳銃は置いたままにしておくべきだったと、言われたのです。』

つかえつかえ老女は語っていたが、今や話しの糸が尽きてしまった。ひょっとするとたった今、あの女性は気が狂っていたのではなく、ただ絶望していただけだと、思い当たったのかもしれない。そして絶望した人々は、手元に置かれた拳銃に招かれると、しばしば特別に死を捜し求めるものだということに。

『それで、男性の様子はどんなでしたか？』と、ミュラーはまた話しを続けさせるために、老女に尋ねた。そこで借家人について、老女は説明した。

背丈は大きく肥っていて、白髪混じりの長い髭を蓄えていた。目付きはわからなかった。男が黒メガネをかけていたからである。

『顔には、何か人目を引くものに気付きませんでしたか？』

『何にも----髭が大変濃くて、顔一面を覆っていたこと以外には。』

『頬はよく見えなかったんですね？』

『ほとんど見えませんでした----つまり、そのことには注意を払いませんでした。』

『彼の手がかりになるようなものは、何も残していないんですね？』

『何も。いやいや残していますとも----だけど残念ながら、これではあの人のことはわからないでしょう。』

『一体何ですか？さあ、話して下さい。』

『昨日、あの人が気を失った女性を、馬車の中へ運ぶのに大忙しだった時、片方の手袋をなくしたんです----それは、下の私の部屋にあります。といいますのも、昨日から又、下に住まっているものですから。』

ミュラーは立ち上がっていた。そして窓の横にある古い書き物机に歩み寄った。机の上はかなり乱雑だった。机の上板には、普通の紙だが、黄ばんだ何枚もの紙が置かれ、その横に先の尖った鉛筆が一本、また通常、書き物机の上には見つからないような物があつた----ひと切れのパンで、その一部分の柔らかい所が欠けていた。

『すべてがぴったりだ』と、ミュラーは小声で言った。『あの若い女性は、比較的自由だった最後の数分間で、小包みを作ったんだ。』

それからミュラーは、取り乱している老女の方へ顔を向けた。

『来て下さい』と言うと、階段を降りていった。震える足つきで、女はミュラーの後に従った。

『あの婦人が連れ去られた馬車は、どんな馬車でしたか？』と、ミュラーは下へ降りながら尋ねた。

『一頭立ての馬車でした。』

『馬車のナンバーは見ませんでしたか？』

『ええ、見ていません。ただわかったのは、馬車が大層古いもので、御者も、本当に落ちぶれたような身なりだったということだけです。』

『年老いた男だったんですか？』

『40 歳前後でしょう。それにアル中みたいに見えました。明るい冬物の上着をきていました。』

『結構です----あなたは、どこに住んでらっしゃるんです？』

『ここです。』

二人は今や、廊下に立っていたが、アムスターはそこであちらへ行き、こちらへ来たりしていた。老女は暖房で温かくなっている部屋を開け、タンスに急ぎ足で歩み寄り、そこにあった手袋を、探偵のミュラーに持ってきた。

ミュラーはそれを仕舞いこむと、どんなことがあっても家を出ないようにと命じた。いつでも、警察に出頭する用意をしていなければならないのだからと。そして、アムスターと外の通りへ歩み出た。

通りの明るい光のもとで、ミュラーは手袋をじっと見つめた。この手袋に合うのは、細い、華奢な男の手に違いなかった。大柄の、がっしりした身体には、決してふさわしからぬ手だった。というのも、間違えようもなくミュラーの小さくて愛らしい手に、たった今確かめてみたのだが、この手袋はぴったりだった。探偵のミュラーはこのように、手袋を試しにちょっとはめてみたが、その時、中指が何か皺くちゃになったものを押し込む感じがした。ミュラーは立ち止まり、手袋を裏返してみた。すっかり、くしゃくしゃになった路面電車のキップがこぼれ落ちた。

『もし古い一頭立ての馬車に気付いたら、その御者は 40 歳前後のアル中みたいな男で、明るい冬用上着をきているが、その男を雇っておいて下さい。もし手が空いていればだが。そして近くの警察署まで馬車を走らせ、そこに男を引き留めておくように。もし男の手が空いていなければ、少なくとも、馬車のナンバーだけでも

見ておいて下さい。それからもうひとつ----だがもうあんた自身、知っている通り----この馬車の中では昨日諍いがあったし、今日はもちろんのこと、既に右側の窓ガラスが新しいものになっているだろう。』

ミュラーはこのように話しながら手袋を仕舞いこみ、歩きながら、くしゃくしゃになった路面電車のキップの皺を入念に伸ばした。

アムスターは了解した。昨日の、夜中の馬車が辿ったコースの出発点が見つかったのだ。

『それじゃあ、一頭立ての馬車の客待ち場を、虱潰しに当たってみましょう』と、アムスターは元気一杯に答えた。

『そうしてくれたまえ----だがしかし、それは、もし別の方法でもっと早く目標に到達出来ないようなことになった場合の話なんだが。』

『どんな方法です？』

『すぐにわかるでしょう。』

ミュラーは、手元に仕舞っていた行方不明の女性のメモ帳を引っ張りだすと、中に挟まっていた路面電車のキップを手に取り、もうひとつのキップと比べた。

キップは二つとも、夕方の 6 時から 7 時のスタンプが押され、同一区間になっていた。

『それは、婦人を迫害している男のものですか？』と、アムスターが尋ねた。探偵は頷いた。『それが、どうして役立つんですか？』

『この路面電車の区間のどこかに、と推測しているのだが、一頭立ての馬車の客待ち場があって、そこで、我々が探している馬車が雇われたんです。馬車を雇った男は多分、西部鉄道の 6 時半の汽車で到着したんでしょう----すなわち、男が我々の町に住んでいないと推測できる理由があるんです----そして、路面電車でここへやってきた。途中で、計画が完了した昨日、男は馬車を雇ったんでしょう。だから当面、この路線に留まっていて下さい。正午には、私の姿は警察本部の建物の 7 号室で見つけられます。この件はちゃんと言いおいておきましょう。だから、報告するようなことでもあれば、そこに頼みます。じゃあ、よろしく。』

急ぎ足でミュラーは先へ歩いて行った。ある小さなコーヒー店で朝食をとり、それから警察本部へ向かった。そこで報告を済ますと、その後、フェルナーの所へ出かけた。フェルナーは既に、大層いらいらしながらミュラーを待ち受けていた。

ミュラーはそこで、既に久しい以前に亡くなっていたアスタ・ランゲンの父親の家庭、上流家庭をかって支配していた事情について、様々なことを知ることが出来た。しかも、あのとっくに過ぎ去った時代について、ミュラーに多くの説明をして

くれたのは、他ならぬあの老ベルナーだった。

ミュラーがドームガッセの古い家を立ち去る時、ベルナーの心に刻み込んだことは、人が呼びにきたら、どんな時間でも家を出れる準備をしておくようにということだった。

再び、警察本部の建物にミュラーは戻ってきた。そして、数多くの電報を目の前に並べた上役から聞いてわかったところでは、昨晚と今日の間には、いかなる病院にも、町立あるいは州立の、いかなる精神病院にも、女性の患者は収容されていないということだった。行方不明の令嬢の記述に一致するような病人は。

一頭立ての馬車についても、相変わらず通報はなかった。ミュラーの報告以来、多くの警察官の捜索にもかかわらず。すでに短い冬の一日は終わろうとしていたが、その時、アムスターが喘ぐように7号室へはいつてきた。警部はちょうど、ミュラーと最新の事件について協議しているところだった――今や、二人は固唾を飲んで、ドッと駆け込んできたアムスターを見守った。

『例の馬車を見つけました。あの向こうの方ですが、建物の通路のあちら側で、待たせています。』

これが、アムスターの報告だった。

ミュラーはすでに上着を着込んでいた。

しかし博愛主義者のお役人は、ミュラーから自発的に助手になったアムスターのことは聞いていたが、そのアムスターと話し合いをしていた。そして二三のメモをとっていた。アムスターがついに、慎ましく引き下がろうとした時、お役人はこう述べた。『私は、あんたが将来を心配しないдейように、保証してあげることが出来る。もし、我々の有能なミュラーのもとで、秘密警察の仕事に身を捧げる気があれば。その考えがあれば、直ちにここに留まって働いてよろしい。それというのも、アスタ・ランゲンの事件では、今日でもまだ、やるべきことが一杯あると思われるし、そのためには、頭の切れる強い男が必要なんだから。見習いとして仕事をやらせてもらえますね。』

アムスターは同意しながら、お辞儀をした。彼の顔付きは今や、望みを失った不機嫌な表情の代わりに、あの落ち着いた決然たる様子をみせていた。自分と折り合いをつけ、決心していたのだ。

ミュラーはその間、建物の通路を通り抜け、ちょうど今、馬車のドアの取っ手に手をかけたところだったが、既に不機嫌極まりない顔付きの御者は、ミュラーの姿を認めた。

『もう予約済みだが』と、男は言った。『しかし、早い者勝ちだ。さあ、乗って下さい。』

『もちろん乗せてもらうが、まず教えてもらいたいことがある。昨晚、若くて病氣のご婦人と、連れの男をどこへ乗せて行ったのかね。』

狼狽して、御者は質問したミュラーをじっと見つめたが、間もなく再び落ち着きを取り戻した。

『一体、あんたはどなたですか？』と、ついに愛想を見せながら尋ねた。

『それは警察本部でわかるだろう』と、ミュラーは少なからず気持ちよさそうに応じながら、完全に落ち着いた様子の御者に合図して、馬車に乗り込んだ。2分後、馬車は止まった。

その間、ミュラーは馬車の中で、ある発見をする時間があった。それは、小さな、切り株のようなカットガラスで、上品な香水の栓つき小瓶に見られるものだった。今やミュラーには、どうしてアスタ・ランゲンが、自分の使っていた香水の香りを、現在までこの馬車の中に残すことが出来たかが明らかになった。また何故この香りが、放り投げられたメモ帳に、あれほど過度なくらい滲み通ったのかもわかった---偶然にか、あるいは意図してのことか、彼女はメモ帳に書いていたように、衣服のポケットに仕舞っておいた香水の小瓶のフタを開け、このような痕跡を残しておいたのである。

3) ひとけのない別荘で

御者が、職務を取り行っている警部、S博士の前で報告した15分後、博士はアムスターと一緒に、呼び寄せた辻馬車に乗り込んだ。その御者台には、完全武装した安全局の警備員が、民間人の服装をして飛び乗った。

『あの馬車の後をずっとつけていくように』と、警部は御者に言い付けていたので、その通りになった。僅かの距離を保ちながら、辻馬車は、ミュラーの乗っている一頭立ての馬車に従った。ミュラーは一寸ばかり回り道をしながら、ドーム小路へ入り込み、14番地の前で止まった。

ミュラーは老人ベルナーを迎えに行った。既に一緒に来ることになっていたフェルナー氏も見えたが、年老いた病人をどうやらこうやら説得して、その計画を諦めさせることが出来た。

この一寸した突発事の後、二台の馬車は速いスピードで更に先を進んだ。

そのうちほぼ夜に、暗闇の嵐の夜になっていた。嵐の夜というのは、今や一頭立ての御者と並んで座っているミュラーには、何とも特別な感じだった。既に半時間、馬車は走っていた。

身を切るような風が吹きつけ、ミュラーの霜で赤らんだ頬には、鋭い針のような氷の水晶が流れて来た。彼はほとんど眼を開けていられなかった。それにもかかわらず、ミュラーはちゃんと見ていた。馬車は建物で混み合う街の辺りを既に通り過

ぎ、今や新築の建物が半ば出来上がっている区域へ走り込んだのを。そしてこの区域ももう終わった。街の境界に達していた。荒れ果てた道が始まった。右や左に板塀が立っていた。最早ミューラーには嵐も寒さも何一つ感じられなかった。彼はその道を観察した。

『ここであんたはぎょっとさせられたんじゃないのかい』と、板塀のある場所を指差しながら言った。

『どうしてですか？』と、相手は不平そうに述べた。

『だってここで窓ガラスが割られたんだから。』

『それに漸く気付いたのは----家に戻ってからです。』

『そうかい、だったらあんたは相当飲んでいたに違いないな。』

御者はよく分からない言葉をぶつくさ述べた。

6 時になっていた。深い暗闇が雪明かりで和らげられていたものの、辺り一面を覆っていた。

更に、およそ半時間後には、その一頭立ての馬車は停車した。

『あそこの上に家がある。庭の門の所まで行って貰えるかな？----止めてくれ！』

ミューラーはもう地面に立っていた。

彼は馬車の扉を開けて、ベルナーが出て来るのを手伝った。老人は震えていた。

『馬車の道は酷いものでしたね』と、老人はどもり勝ちに述べた。

『帰り道については、そう言われなことを願っています』と、探偵は老人を親しげに慰めながら、更にこう付け加えた。『今は警部殿の許に留まっておいて下さい。』

警部は既に同乗者と共に辻馬車を降りていた。彼の鋭い視線は、大きなびっしりと植物で覆われた庭と、その中央にある小さな家の上へ滑っていったが、その家は、暗い空からぼんやりと際立つように建っていた。

家屋の階層にある二つの窓から、僅かなあかりが漏れてきた。男たち、つまり探偵とアムスターの眼は、一瞬間そこに釘付けになった。それから二人はお互いに、高い板塀に歩いて行った。その板塀は、離れた脇の方で隣の地所から庭を区切っていた。二人は二言三言言葉を交わした後、銘々の板塀を揺すった。それには特別用心する必要はなかった。というのも、二人が惹き起こした物音よりずっと酷い嵐の騒音が、樹々の間を通り抜けたからである。今、アムスターは小声でミューラーに呼

びかけた。ぐらぐらする板塀を見つけていた。そこで若さに任せた腕力で、その板塀を完全にもぎ離していた。

ミュラーは満足げにアムスターに頷くと、急ぎ足で、待っている三人の許へ向かい、彼らを呼んできた。一分後には皆、庭の中へ入り込んでいた。そして用心しながらその家へ歩いて行った。

当然ながらドアは閉められていたが、一階の窓には格子戸がなかった。アムスターは懇願するような面持ちで警部を見つめた。警部は『いいでしょう』と頷いた。

次の瞬間、アムスターは窓台の一つを押し付けて、差し錠を開けた。そうしなくても、内窓は偶然なのか割れていたもので、物音を立てず開けるのに困難はなかった。アムスターは暗い部屋の中に姿を消した。2 分後、玄関のドアの鍵がガチャガチャと微かな音を立てて開けられた。正義の進路が開いた。警官は、再び閉じられたドアの所に留まった。彼はランタンを少しだけ灯し、その手には、いつでも発砲出来る準備の整った拳銃が握られていた。

ミュラーもランタンを取り出し、今や赤々と照らし出させた。

それから、ドアと階段だけが通じている綺麗な廊下へ入り込んだ。

ドアを通してアムスターがやって来ていた。彼はドアを閉めるのを忘れていた。今、彼はドアを閉めたが、それというのも、開いた窓から吹きつけるすきま風が、彼らを揺さぶったし、何と言ってもどんな物音も立てたくなかったのだ。

つま先立ちの忍び足で、4 人の男たちは 2 階へ昇って行った。そして急ぎ足で 2 つあるドアの近い方へ入り込んだのは警部だった。2 つのドアは互いに向かい合って廊下にあった。彼は外側のドアに付いていた鍵穴を廻した、するとドアは開いた----暗い部屋の中が見えたが、そこには矢張り何処からか明るい光の帯が落ちていた。大急ぎで役人の男が入り込み、急き込むようにベルナーが後に続いた。それというのも熱っぽい不安感が、この家に入ってから老人を捉えていた。ひょっとすると家の中には、お気に入りのお嬢様が、既に死体となって横たわっているかもしれない。更に一步進むと、彼の口から甲高い叫び声が漏れ響いた。警部が 2 番目の部屋のドアにぶち当たり、その部屋が今や見通せたのだ。快適な、上品な部屋だった。ただ重々しい鉄棒が閉じられた窓の鎧戸を固定していたが、それは、肘掛け椅子に弱々しく横たわっている若い御婦人が、囚われの身であることを思わせたのである。

今、彼女は眼を上げた。彼女の青ざめた顔に、まさしくまだ現われていた深い疲労の色が、驚きの表情に変わった----しかし今----今や彼女は自分を殺そうとする者ではなく、そう、自分を救う者たちがやって来たのだと理解したに違いない。というのも、明るい赤味が頬の上を走ったし、恐怖が凡て過ぎ去ったのだという感情から、彼女の眼も唇も微笑んだ。しかし余りにも速く、速すぎる変化だった----こんな事には、長く責めさいなまれてきた魂は耐え切れぬ----溜息を衝きながら、急に立ち上がった少女は床の上にくずおれた。

ベルナーは啜り泣きながら、既に彼女の横に跪き、『彼女が死んでしまう----死んで行く』と、嘆きの声をあげた。

年老いたベルナーが叫び声を上げた時、ミュラーは思わず知らず振り返った。すると期待していたことが起きた。廊下の向こう側のドアが開き、大柄のすらりとした男が姿を現わした。髯のない顔で、右頬には傷跡があった。眼の据わった眼差しをこちらへ向けると、一瞬身動きもせず立ち止まった----だがしかしほんの瞬間、平静さを失い、部屋の中へ滑り込むように引き返した。ドアはすぐさまパタンと閉まった。その時、ドアとその隙間の間に脚が差し込まれ、アムスターが力を揮って、部屋へ入り込もうとしていたミュラーのために、ドアが完全に押し開けられた。『すばしっこく、よくやった！』とミュラーは大声を上げた。これは、急ぎ足で逃げ去ろうとする犯罪者と、逃亡を阻止しようとする者2人にとって、重要なことだった。

『それを放せ！お前が窓を開ける前に、2発発射出来るんだ』と、ミュラーは最初の大声に更に付け加えて言った。すると男は向きを変え、部屋の中央へゆっくりと歩いた。そして書き物机の横にある安楽椅子に腰を下ろした。アムスターもミュラーも彼から眼を離さなかった。2人それぞれ、悪漢が更に害を及ぼさぬように準備を整えていた。アムスターはその若い力で、ミュラーは最悪の場合には彼の拳銃によって。しかし探偵には、今や既に解っていた。ランゲンは反抗的振る舞いをする気は全くないのだと。何でもないように見える仕草が、その事をミュラーに教えていた。ランゲンが書き物机に歩いて行った時----ミュラーははっきりと気付いたのだが----ランゲンの眼は炎のように燃え上がっていた。そのとき彼の細い唇には、意地の悪そうな微笑みが浮かび出た。そして一秒で机に着くと、手に持っていた絹のハンカチを、一見うっかりしたように机の上に落とした。ハンカチは今や、探偵ミュラーの鋭い眼が注目していた、ごく小さな瓶を包み隠した。小瓶には一枚の黒紙が貼られ、白い髑髏がにやにや笑いを見せていた。ミュラーは今まで、その小瓶が空なのか中味が満ちているのか解らなかったが、今やその中には、少なくとも男一人が必要とするだけの毒薬がはいっているのが解った。男にとっては、自分の周囲のあらゆる一切のものが消失してしまい、従って死すらも最早恐怖ではなかったのだ。これ等のことが凡て解ったものの、ミュラーにはこの悪漢の冷静さは感歎すべきものだった。男の眼差しは今や、間違えようもない好奇心の表情を見せて、ミュラーに向けられていた。

『あんたは何者なんだ、それから更にここでは？』と、悪漢は冷静に尋ねた。

『探偵のミュラーだ』と、こちらは落ち着き払って自己紹介し、アムスターを指差しながら大声で付け加えた。『差し当たり、おまえは此処にいるのが我々2人だけだということで、安心するがよい、エゴン・ランゲン氏よ。警部殿は今、お前が殺そうとしたお前の義理の妹の件に関わっておられる。』

ランゲンは探るような眼付きをミュラーに投げかけ、顔を撫でた。その後で『殺人だって？誰が私にそれを証明すると言うんだ？』

『まだ必要ない。既に証明済みだ。』

『アスタが消えてなくなるのを願ったことだけは、白状しよう。』

ミュラーは微笑んだ。

『それが何の役に立っただろうか？だってお前は、アスタの全財産を考慮していたのだから。だから義理の妹を殺すことを願った。アスタが不当に要求された手紙、その手紙には彼女の自殺の意図が表明されることになるのだが、その手紙に同意したかどうかということなど、構うことではない。』

ランゲンは立ち上がっていた。しかし彼の取り乱した態度は数秒間続いただけで、それから又、安楽椅子に身を沈めた。

『つまり老女がそういうことを知って、しゃべり散らしたという訳か』と、ランゲンは簡潔に述べた。ミュラーは頭を振った。

『アスタ嬢を通してその事が解ったのだ。』

『この 11 日間、誰も彼女と話した者はいない。』

『だがお前がそうさせたんだ、彼女は馬車からメモ帳を投げ出した。』

『おやおや！』

『解っただろう、お前にはそんな事が起きてはならなかったんだ。』

ランゲンの額には玉のような汗が吹き出た。ひょっとすると、今まではまだやはり、彼の暗い魂の何処かに、何とか言い逃れ出来るだろうという希望が残っていたのだろう。今や明らかにその希望は消え去っていた。

まるで最終の言葉を述べるように気持ちよく、ミュラーは話を続けた。『この 30 年以來、お前のような人間の心の中を覗いてきた私にとって、抑々この事件は多くの点で全く理解しがたいものだ。それだからこそ、私は途轍もなく興味がある。』

ランゲンは額に出ていた汗の最後一滴を拭ったが、それはまだ彼の人間らしい点だった。彼が頭を上げた時、ミュラーは青銅の表情を見たと思ったが、その表情には、ある特徴が多々生き生きと息付いていた。つまり冷ややかな嘲笑という---特徴が。

『大いに自尊心をくすぐられますな、老人殿！私の行動の内面的動機が、あなたの 30 年に及ぶ経験にとって、一つの謎に留まっているのは』と、悪漢は話し始めた。以前の少々掠れた声は、今や完全に明晰な声で、更に話し続けた。『それじゃあ質問して下さい。謎を解いてあげましょう。』そこでミュラーは質問した。

『何故、お前は 11 日間も行動を躊躇ったのか？それに何故、犠牲者をあちこち

連れ回したのか？だって馬車の中でも、実行したいことは出来ただろうに？』

『馬車の中は窓が開いていたんです、尊敬に値する方よ。というのも当時は、忌々しい程の素晴らしい夕べで、隣を走る馬車の人々も窓を開けたい気分になったんです。だから当時それを実行出来ず、残された方法は、アスタが下車する際に紅茶を一杯差し出すことでした。気分が悪かった彼女はそれを飲みました。私は医者だから、種々様々な薬を適当な時期に旨く使い分ける術があるんです。アスタは紅茶を飲んでから、もう何も解らず、24 時間後に、私が街に所有する別荘で目覚めた訳です。』 ----

『それから脅しの紙切れと、その気にさせるために置かれた拳銃を見つけた訳だ ---- いやそうじゃない ---- 拳銃は老女が片付けた。少女が絶望して、使用することになる前に』 と、ミュラーが補足して述べた。

『そういうわけです。あなたは本当に詳細な点まで知ってお出でです。』

『しかしどうして、何故、どうせ義理の妹を死神に引き渡すことを決めていたのだから、そこでチャンスを利用しなかったのだろうか？』 と、ミュラーは急き立てるように述べた。

『階段で一度にせの付け髭をなくしたし、老女に顔を見られたことを恐れたからです。万一の場合、再び見わけられると。そんな訳で、殺害可能な別の場所を捜さなければならなかった。』

『それでこの家を見つけたんだ。』

『その通り、何日も経ってようやく。』

『そしてお前は、アスタ・ランゲン嬢に依頼されたように見せかけて家を借りたんだ。』

『ええ。』

『お前がこの家に入居して数日後、死去した彼女がここで発見されるのを望んだ訳だ。』

『確かに数日後に、あるいはひょっとして数週間後になってようやく。まさしく家を貸した人間が、行方不明のアスタ・ランゲンに対する新聞の呼びかけを読んだ時に。アスタがいつか発見されるのは確かだったし、私には解っていたことだったが、彼女がこの旅行中に携行していた一家の書類も。』

『そうだ、いつの日にか不幸な少女は発見されただろう』 と、ミュラーは考え込むように述べながら、休止を挟んで真面目そうに話し続けたが、休んでいる間、ミュラーの顔つきは同情するような表情を見せた。『そして彼女の「自殺」は決して解けない謎の一つに留まるだろう。精々悪意ある話し方で、次のように時折囁かれ

たとしても。つまり、若くて美しい女性がその人生の数日間、不在証明を持たず、ひょっとすると一定の理由から、滞在地の死に場所に寂しい別荘を選んだことは。』

自分自身に語りかけるように、ミュラーは単調に語った。エゴン・ランゲンは極めて醜い微笑を浮かべながら頷いていたので、勇敢なアムスターは拳を固めたほどだった。

『それに不幸な女性の絶望的な叫び声を聞いても、お前は可哀想だと思わなかったのか？』と、老人は小声で尋ねた。

『思わなかった、だって彼女を憎んでいた。』

『彼女が金持ちで無邪気だったからだろう。慈悲深い彼女は、お前が苦境にあれば喜んで助けてやったのは間違いない。その上、お前は父親の相続財産遺留分を要求出来た。どうして、それを決して受け取ろうとしなかったのか？フェルナーが私に述べたところでは、3万グルデンの額になるだろう。』

『そのうちの2万グルデンは、フェルナーの今まで知らないことだが、私が追い出された時、既に受け取った。いずれにしろ、それをフェルナーはベルナーから聞いて知ったかもしれない。ベルナーは当時証人だったし、正当な時期に話すことを誓約しなければならなかった。残りの1万グルデンを、私は要求しなかった。若しアスタが生きていなければ、全財産を受け取ることが出来たのだから。彼女の死と相続人への呼びかけについては、向こうのオーストラリアで公式の情報を得ることになっただろう。一年後の今頃には金持ちになっていただろう。あんた方が何日か後に来ていればの話だが。』

丸めた拳で膝を押さえつけながら、この言葉で、悪漢はその恥知らずの自白を話し終えた。ランゲンは憤怒の余り次のことに気付かなかった。既に二三分前から書き物机の角っこに寄りかかっていたミュラーが、まさしく必要以上に少々深い位置にあった彼の手を、こっそりと見えないように押しやったので、ランゲンが以前に落としていた絹のハンカチが軽く動くのを。自分の前に眼を落とし、じっと見つめながら、エゴン・ランゲンの眼差しは、彼が自ら魔力で自分に呼び出した宿命の深い暗闇、それ以外の何物も今は見ていなかった。だがしかしミュラーの声が、ランゲンの瞬間的な物思いを引きはがした。

『お前は、自分が未成年の義理の妹の相続人だと考えた点でも、計算違いをした。お前の父親の遺言書によれば、お前があの残りの一万グルデン以上のものを手にすることはなかっただろう。』

『あなたは、アスタが12月3日で24歳になることを忘れている。』

『それじゃあ、その時まで彼女を生かしておく積もりだったのか？』

『物分かりの早いお人だ』と、ランゲンは嘲るように述べた。

『しかし 11 月 18 日から彼女は既に失踪していた。だから後々、お前はどうかやって次のことを証明出来ただろうか？つまり彼女が成人になった後でようやく、遺言書もなく死亡した、即ち自殺を実行したということ。』

『実に単純な方法だよ。私は常に何種類も日刊紙を買っている。例えば 12 月 4 日又は 5 日に至るまで購入して、ここに持って来ておけば、死亡覧に彼女を見つけることになるだろう。』

『お前は矢張り、私以上に狡猾に考える奴だな』と、探偵は素っ気なく言ったが、ランゲン同様に、警部がこちらへやって来るのを耳にした。ミュラーはパイプを口にくわえたが、その甲高い音が既に数秒で、玄関に待機している警備員を呼び寄せることになったし、ミュラーにも解っていることだった。

エゴン・ランゲンは今や見るも忌まわしく、彼の表情は灰色っぽく歪んでいた。しかしながら、彼の唇に浮かんでいたのは怪物の微笑だった。彼はその時、視線を玄関の方へ投げながら、警部が姿を見せるのを眺めた。そして哀れな男は急いで手を広げ、ハンカチを引き千切ると、耳をつんざく叫び声を上げたが、最後には息苦しそうに喘いだ。

『小瓶は私が取り上げた、運命に身を委ねるがよい』と、ミュラーは静かに言うとランゲンに拳銃を向けた。しかし既に狂人のようにミュラーに立ち向かってきた男は、アムスターと警備員に組み伏せられた。----

15 分後、辻馬車は再び街へ向かって走った。エゴン・ランゲンは猛獣使いたちにしっかり監視され、隅っこにかがみ込んでいた。ベルナーは御者台に座っていたが、耳を傾ける御者に、泣いたり笑ったりしながら、自分の可愛いくてならぬ少女の救出劇を語っていた。アスタ・ランゲンは親切な、年老いた警部と狭い車室に座っていたが、そこでは昨日、恐怖の時間を過ごしたのだ。

『お前はもう少しは元気になったかい、哀れな子よ？』と、善良な男は同情するように尋ね、アスタの冷たい手をさすった。するとアスタはうなずき返し、小声で言った。『多分、私は恐怖の重圧から解放されるでしょう。ここ数日間ずっと、その重圧で打ちのめされるかもしれないと恐れていました。しかし私は決して、あの時間を忘れたりしないと思います。もう済んでしまった事実ですが----私が殺されたかもしれないということ。』